

立川

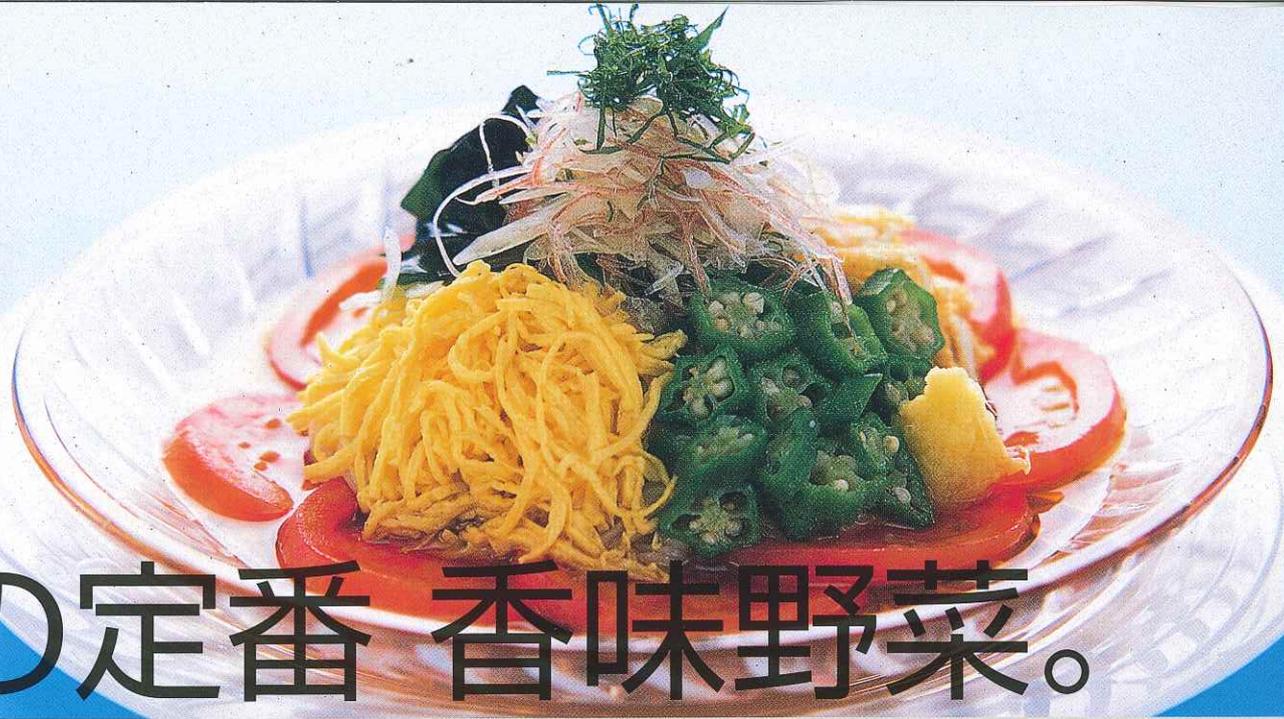
8

立川と語ろう 立川に生きよう
August 2004
écoutez bien Vol.23 No.237



げんき 産直
野菜は味方

1



夏の定番 香味野菜。

【しそ、みょうが、しょうが】

新鮮で安全な産直野菜を食べたくなったら幸町がいい。

JAみどりと東京都、立川市の三者が運営する農産物直売所には、みずみずしい朝取り野菜がぎっしりと並んでいる。買って来た野菜を日本クッキングスクール(錦町)の須田享子先生に調理していただく。

野菜の栄養がからだのすみずみに行きわたって〈げんき 産直 野菜は味方〉!



開店前から人が並ぶ
立川農産物直売所
(幸町1-14-1)

直売所にはこの時期、香りの高い野菜が並ぶ。夏の香りだ。定番野菜の隣に、ピーマン、ししとう、青じそ、みょうが、谷中しょうが、根しょうがなどが生産者の名前付きで売られている。値段も手ごろ。出荷者の嶋田政雄さんは低農薬に心がけ安心して食べてもらえる野菜だと誇らしげにいう。水に気がつかっていると云うのは清水理作さん。毎朝2トンの井戸水を畑へ運ぶ。朝一番の水道水を与えると野菜の味が変わってしまうからだ。「同じ野菜でも作り手で味が微妙に違うんだよね。土も違うしこだわりも違うから」とは清水さん。



嶋田政雄さん
(一番町)

野菜に含まれる色素や香り、あくの成分などのファイトケミカルは、タンパク質、炭水化物、脂質、ビタミン、ミネラル、食物繊維に次ぐ注目の非栄養素で健康を保つための機能性成分。抗酸化力抜群で、がんや生活習慣病の予防にやはり野菜は欠かせない。今回の主役は夏に美味しい香味野菜。しょうがに含まれる辛味成分は強力な抗菌・殺菌作用を持っている。青じその香味成分は抗菌作用に加えて抗ガン作用も期待されるすぐれもの。テルペン、リグナン、ポリフェノールを多く含んだ香味野菜は、暑さに負けそうな体を護ってくれる強い味方だ。

調理指導：須田享子

写真：五来孝平

●サラダ風そうめん

シャキシャキのみょうが、香り高い青じそ、全体をピリッとさせるしょうが。かんたん、おいしい、ヘルシーな一品。

レシピ

材料 (4人分)

そうめん: 4把 (250g) 油揚: 2枚 卵: 2個
オクラ: 8本 トマト: 1個 生わかめ: 20g
(a) 青じその葉: 8枚 みょうが: 4本 しょうが: 1片
(b) めんつゆ
醤油: 1/4カップ みりん: 1/4カップ
だし: 1と1/4カップ

作り方

- (b)のめんつゆを作り冷やしておく。
- 油揚は熱湯をかけ油抜きをしてフライパンでカリカリに焼きせん切りにする。
- 卵は薄焼きにして錦糸卵を作る。
- オクラはへたをとり塩みがきして、沸騰湯で茹でザルにあげ冷まし小口切りにする。わかめはもどして2cmくらいに切る。
- トマトは湯むきして薄切りにする。
- (a)の香味野菜はせん切りにして軽く水にさらし水気を切る。しょうがは皮をむいておろす。
- そうめんを茹で流水でよく水洗いしてザルにあげ水気を切って器にもる。
- (7)の上に2~6を彩りよく盛り、(1)をかける。
※めんつゆは醤油1 みりん1 だし5~6位までのばしてもよい。錦糸卵は好みで炒り卵でも。

ひとりひとりの心に舞台からの宝もの

立川子ども劇場代表理事 鈴木 節子さん



■鈴木節子(すずき せつこ) 静岡県生まれ。小学生時代に父親の転勤で東京に移り深川・門前仲町で育つ。結婚をきっかけに立川市に住み1977年に立川子ども劇場に参加して以来、舞台芸術を通じて子どもたちを豊かに育てる活動をする。立川子ども劇場は昨年NPO(特定非営利活動)法人となり、今年30周年を迎えた。たちかわ子ども21プラン策定市民委員会委員、たちかわみんなの音楽祭実行委員、立川文化市民フォーラム、学校ボランティア、その他地域の子ども・文化活動などにも取り組んでいる。富士見町在住。立川子ども劇場事務所は高松町2-3-19(電話042-526-0731)。

■芳賀敏博(はが・としひろ) えてびあん編集長

於：曙町 えてびあん編集工房
写真：宮保 大輔

芳賀 5月号で立川親子のよい映画をみる会の岡野昌子さんと対談させていただいたんですが、親子映画の会が昨年30周年、立川子ども劇場は今年30周年です。映画と舞台という違いはありますが、立川の地で子どもを対象にした文化活動が長く続いているというのは素晴らしいと思います。その間の公演回数やそこで育った子どもたちの数を考えただけでも、すごい。

鈴木 30年間にかかわった人の数は何万人、ステージ数は3000以上ということになるでしょうね。私たちは子どもたちに芝居・音楽・芸能など生の優れた舞台に触れてもらうこと、あそびを通じた体験をしてもらうこと、身近な地域で人と人が集うことを活動の三つの柱にして

いますけど、実はこうした子どもを対象にした文化活動というのは日本全国を見てもそう多くないんです。特に日本ではお芝居や音楽を大人でも生で観たり聴いたりする機会はまだまだ少ないですね。**芳賀** 育ったのが田舎のせいもありますが、僕の小さい頃に生で舞台を観る機会なんてほとんどありませんでした。**鈴木** 私も夫も東京の下町育ちで、月島に住んでいた夫は歌舞伎座に出入りして裏木戸から入れてもらったりしていたんですけど、私は生まれた時から父が子どものためにレコードをしょっちゅう買ってきて聴かせてくれましたけど、お芝居なんて子どもの時はほとんど観たことがありませんよ。もっぱら近くの映画館で高田浩吉の時代劇なんかを観ていま

した(笑)。**芳賀** その鈴木さんが子ども劇場と関わるようになったのは、どういうきっかけで?

鈴木 入会したのは1977年ですから設立3年目ですね。住んでいる富士見町団地で夫と親しい方が「奥さんは入りませんか?」と。夫もごく軽い気持ちで「たぶん入るんじゃないですか」と言ったらしくて、私も当時5歳と2歳半だった二人の娘と一緒に舞台を観たら楽しいんじゃないかと軽い気持ちで。まさかこんなに長くかかわるなんて思ってもみませんでした。

芳賀 そんなに長く続いたのは、やっぱり子ども劇場の活動が魅力的だったからでしょ。

鈴木 30年の間には大赤字を抱えた時期もありますし、今も財政的には青息吐息でやっています。まず子どもと一緒に舞台を観るのが楽しみでしたし、子育ての場として大勢の方にいろんなことを教えていただきました。そういう人と人のつながりの魅力でやってこられたのかな。

芳賀 芝居でも音楽でも、子どもの頃にそういう生の体験ができるって、うらやましい。

鈴木 舞台はその日によって出来不出来がありますし観客によっても変わりますからね。まさに一期一会。ひとつの舞台を観ていても子どもそれぞれに受け止め方が違うんです。舞台上の人物に完全に同化している子もいれば、舞台装置ばかり観ている子、踊りや歌にしか興味を示さない子もいます。幕が下りた後の反応も、歌いながら出て来る子がいれば踊りながら出て来る子、親にしゃべりまくりながら出て来る子、アンケートの記入台のところに飛び込んで書き出す子、みんなそれぞれの表現で感動や「よかった!」という思いを表すんですね。そうい

う時の子どもたちの表情を見ると本当にやっていたよかったなと感じます。

芳賀 子どもは感性で受け止めるから反応もストレートですよ。

鈴木 大人はせっかくお金を払ったんだからというようなことがありますけど(笑)、子どもは面白くなければ笑いませんし「つまんねえ!」と言う、お義理の拍手なんかもちろんしない。それでも子どもは子どもなりにいろいろなものをつかんでいるんです。帰ってから「どうだった?」と聞いて子どもが何も言わないと、親は「気に入らなかったのかな」とがっかりしたりしますが、たとえ舞台を観ていないように見えてもちゃんと何か受け止めている。それがしばらく後に分かることがあります。若いお母さんたちにそういうことを伝えている私自身も、わが娘を通じてずいぶん教えられました。

芳賀 無駄なものなど何ひとつない(笑)。

鈴木 そう! 一見無駄なこと、寄り道のようなことが大事なんです。そこから発見することの方が多いし、そこで得た感動をきっかけに子どもはものすごく意欲的になれる。でもそういう寄り道ができにくい社会になってきました。今の子どもたちを見ていると決められた枠組みの中でいつも周りを気にし、悲鳴を上げているみたい。次の時代を担う子どもたちが夢を持っていないとしたら、それは子どもたちに伝えるべきものをちゃんと伝えていない私たちの問題だと思うんです。では今何をやるのか。いろいろな切り口があるでしょうが、私たちは生の舞台を媒介に、親も子もいろいろな考え方や生き方を認め合える優しさ、思いやりというものを育てたい。またそれを通して人と人が育ちあうことが子ども劇場

の大きな目的なんです。学校なら答えは予め決まっています。マル、バツをつけられますが、舞台の感じ方はどんな子どもも全部マルです。違っていてもいい。違っていいからいい。それが文化、芸術の良さです。

芳賀 立川市は「文化によるまちづくり」を提唱しています。

鈴木 昔はお正月には下着から全部、新しいものに着替えたりしましたよね。贅沢ではなく生活にちょっとしためりはりをつけることだって立派な文化です。日常の中にこそ文化があるんです。私たちも常に立川をもっともっと文化の豊かな街にしたいと考えていますけど、まず次の時代を生きる子どもたちが心豊かに育っていくことが大切だと思います。彼らがこの街に住んで原風景と思える何かを心に持つことができれば、やがて立川はもっともっといい街になるでしょう。仮に立川からよそに移ったとしても、きつ行った地で文化の花を咲かせてくれます。

芳賀 昨年NPO法人となって、創立30周年は新たなスタートの年でもありますね。

鈴木 私たち、NPOのような社会的立場には本当にうかつたんですが、NPO法人化のご挨拶でいろいろなところを回っていると、組織として信頼していただけるようになったかなという感触はあります。NPOになったからといってお金が入るということはありませんけど(笑)。実際のところ約350人の会員で幼児、低学年、高学年、それぞれ年齢に適した作品で年5回程度の公演を維持していくのは大変なんですけど、がんばりますよ。幹となる目的は守りながらより風通しのいい形にし、新しい方もどんどん入っていただきたいと願っています。

曙町	輸入文具 ホワイトハウス	曙町2-11-2-4F 525-8558
曙町	ステンドグラス ぱさーじゅ	曙町2-11-2-4F 522-1941
曙町	スパゲティ専門店 はしや	曙町2-11-2-4F 528-2338
曙町	立川リージェントホテル	曙町2-11-7-2F 522-1133
曙町	フランス風家庭料理 ラ・フランス	曙町2-11-8-6F 529-5522
曙町	ビックカメラ 立川店	曙町2-12-2 548-1111
曙町	Wine & Dining るもん	曙町2-12-13 527-3022
曙町	東京三菱銀行 立川支店	曙町2-13-3 524-4121
曙町	ヤマハ 立川センター	曙町2-17-3 523-1400
曙町	カフェ アバン	曙町2-17-15-2F 527-4479
曙町	トボス 立川店	曙町2-18-18 525-0331
曙町	55DPE Station トボス立川店	曙町2-18-18-B1F 528-7558
曙町	三井石油 フロンティア立川	曙町2-19-9 527-3943
曙町	手打ちそば しえもと	曙町2-20-5 529-5468
曙町	溪流魚菜料理 一竿	曙町2-22-23-B1F 527-3640
曙町	洋風居酒屋 赤い靴	曙町2-25-4 527-6480
曙町	園部肉店	曙町2-28-16 522-2901
曙町	串やきと牛たんの店 JEAN	曙町2-32-14 529-6210
曙町	立川市女性総合センター アイム	曙町2-36-2 528-6801
曙町	三田花店 立川高島屋店	曙町2-39-3-1F 526-4187

えてびあんの輪
立川と語ろう 立川に生きよう
えてびあんなは
リストのお店にいつもあります

今月は 曙町・高松町・若葉町のお店です。

曙町	エミリーフローゲ 高島屋立川店	曙町2-39-3-3F 526-9788
曙町	立川高島屋 サービスフロア	曙町2-39-3-7F 525-2111
曙町	オリオン書房 ノルテ店	曙町2-42-1-3F 522-1231
曙町	ジェイティビー 立川支店	曙町2-42-1-8F 521-5550/5585
曙町	和菓子舗 花奴万葉庵 工場売店	高松町1-22-8 0120-398785
高松町	多摩画材(景品交換所)	高松町2-1-25 522-6031
高松町	丸助青果店	高松町2-4-18 522-3542
高松町	スーパーやなぎや	高松町2-5-17 522-4322
高松町	米穀・食料品 横町屋	高松町2-11-23 522-2609
高松町	山梨中央銀行 立川支店	高松町2-16-13 526-1571
高松町	ふじ整体院	高松町2-25-2-2F 540-9155
高松町	OBANZAI-YA 茄子菜	高松町3-14-2 521-2918
高松町	書籍・雑誌 フレンド書房	高松町3-18-2 527-1555
高松町	活魚割烹 きよみず	高松町3-19-2 526-3885
高松町	サロン・ケベクア美容室	高松町3-21-12 527-4716
高松町	HAIR MAKES たしろ	高松町3-26-16 525-2175
若葉町	ふとんの 青木寝商	若葉町1-8-1 536-6833
若葉町	シルバーレストラン サラ	若葉町1-10-1 534-0602
若葉町	Beauty Salon リラ	若葉町1-11-1 536-3048
若葉町	浅見内科医院	若葉町1-11-20 537-0918



「立川砂川街道」駅前旅館あづまや



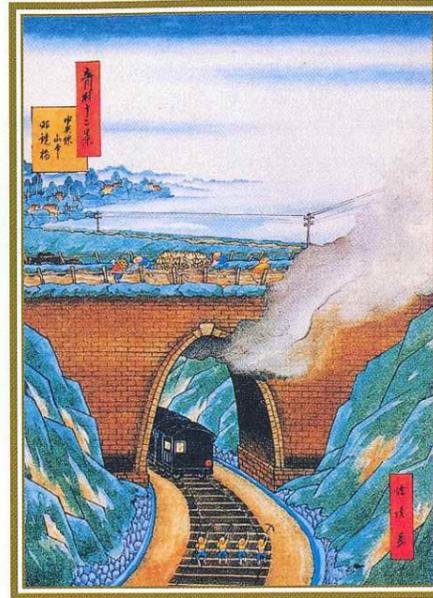
立川市有形文化財「立川村十二景」。
写真が一般に普及していなかった時代の立川を、そこに暮らす人々の風俗とともに描いた十二枚の絵がある。「あの時分、北口から富士見町の貝殻坂に行くなんて、新宿に行くのと同じような感じだった」と話す岡崎さんは明治四十三年生まれ。立川村十二景が実際にあった頃を知る貴重な語り部だ。

岡崎清平さん(94)と語る

立川村十二景があつた頃

隣の塚善には有名な柳があつて、裸電線に触れて火花が散るのを幽霊だと大騒ぎになったこともあるとか。戦争中の強制疎開で岡崎さんは柴崎町に移り、古き良き北口の面影は、しのぶこともできないほど変貌してしまつた。

十二景のほとんどが時代の中でさまざま変わりつつある中、わずかに面影を残すところがあるという。「ほら、汽車の煙こそ出てないけれど同じようでしょ」と鈴木功さん(富士見町・立川民俗の会)が案内してくれたのは眼鏡橋。「昔のままのレンガも残ってるんだよ」と指さすところを見れば、確かに掘り抜きの壁にレンガがある。「百年を経た明治のレンガだよな。」(本村)は健在なのだ。



「山中眼鏡橋」



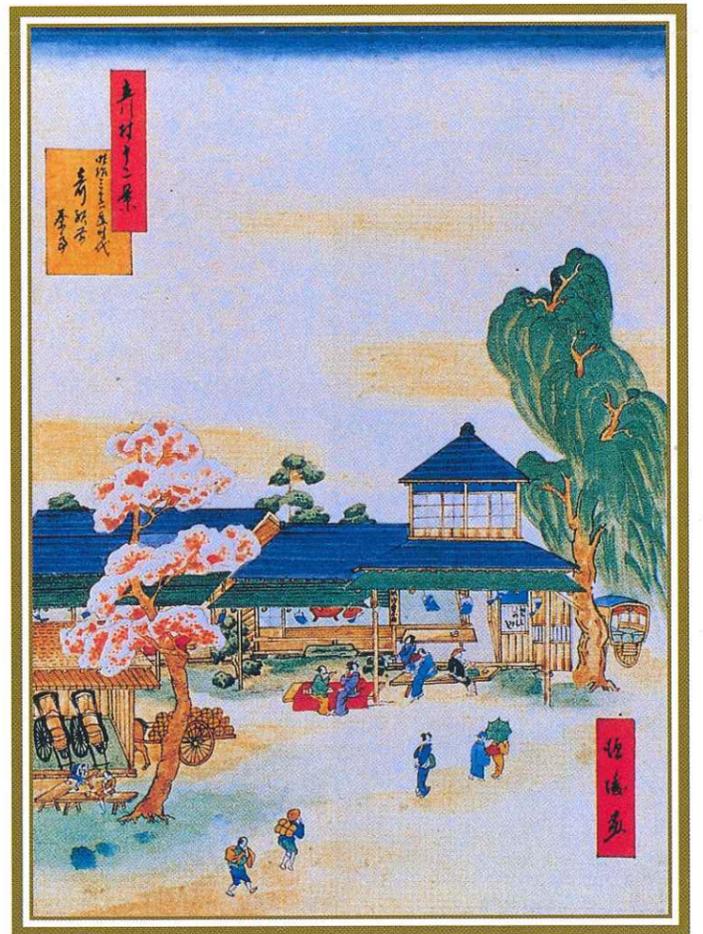
現在の眼鏡橋

橋に残るレンガ



鈴木 功さん

「立川駅前茶亭」伏見屋の隣にあった塚善が描かれている



丸芝鮎氣場付近にはモノレールが走る



「玉川河畔 丸芝鮎氣場」丸芝館別館が描かれている

佐藤 典子さん(錦町)

立川市役所時代に、現在も会場をサンサンロードに移して市民に親しまれている「ぱっかり市」などを企画。文化振興課長をつとめて昨年退職後、アイディア+行動力を買われて、高齢化時代の新しい生活の場として根川沿いのできた高齢者専用住宅、至誠ホーム・スオミのアクティビティプロデューサーとして活躍する。居住者向けのコンサートや朗読会など定期的な文化プログラムだけでなく、高齢者の経験や能力を地域に活かす社会参加にも積極的に取り組む。人と地域への情熱は、新しい場を得てますますさかん。

根川緑道で 写真：細江英公

かたこと

8月はえくてびあんにとって創刊の月です。昭和59年(1984)に生まれた立川のタウン誌もちょうど20年。本号から21年目に入ります▼昨年8月から編集人が変わり早くも1年。新連載もスタートしました▼立川産の新鮮で元気な野菜を使って須田亭子さんに四季折々からだも元気になるお料理を作っていただくげんき産直野菜は味方。女性ならではの視点で1年を通じて新鮮で元気なシリーズをお届けします▼裏表紙で始まったく郷愁への旅は、緻密かつどこかノスタルジックな高松町在住の銅版画家、兼兼広人さんの世界を半年にわたってご紹介します▼対談させていたいただいた鈴木節子さんの立川子ども劇場は30周年。ナマの舞台を観た子どもたち、ひとりひとりの感動の仕方が違うという鈴木さんの言葉が印象的でした▼お芝居に限らず、ひとつひとつかけがえない個性が集まってこそ大きな力や美しいハーモニーが生まれます▼えくてびあんもスタッフや立川の多彩な方たちの個性が響き合う場でありたいと願います▼VIEWは、立川の古き良き時代の生き証人というべき岡崎清平さんのお話から「立川村十二景」の世界に遊んでみました▼明治43年生まれ。ご高齢にもかかわらず、などと書くのが失礼なくらい矍鑠として歯切れのいい語り口。はたちのえくてびあんなど、実にまだまだひよっこです。(芳)

スタッフ
編集 大久保清志/清水恵美子/中薫子
デザイン 池田隆男 (WATER DESIGN ASSOCIATES)
AMNET design factory
写真 五来孝平/宮保大輔

えくてびあん (C) 8月号
第23巻 通巻237号
平成16年8月1日発行
発行 えくてびあん編集工房
〒190-0012
東京都立川市曙町2-17-5 杉田ビル3F
TEL 042-528-0082 FAX 042-528-0065
編集人 芳賀敏博
発行人 加賀悦也
印刷 (株)大廣社

無断転載を禁じます。

タチカワ誰故草

緊張して謹聴した

森 忠明

大学の恩師の米寿を祝う会に出るべく中央線に乗った。目的のJR品川駅に到着しなかった時、私のケータイが鳴った。でると九條今日子氏。緊張した。「東由多加(演出家・故人)の姉さんが森くんの詩集を読みたがってるんだけど、残ってるかしら。売り切れかな?」。すれっからしの私でも、緊張してしまふ人が現在二名いる。その第一が九條先生。なにしろ我が師山修司の伴侶だった方だし、古稀近いのに美人だし、一九六八年、ハイティーンの私に「チュウメイさん、どんどん詩を書きなさい。思潮社に売り込んであげるから」とマジでおっしゃり、励ましつづけてくださったのである。品川駅で降りるのを忘れてしまったことからもテンシテイが知れる。もう一人、今の私を強ばらせるのは本誌の編集長、芳賀敏博氏。顔、眼光、物腰が寺山修司にそっくりなんだもん。故郷が同じだからって、こんなに似てるのはめずらしい。当連載に妙な生硬さがあるのは、怖い師匠と同じ眼の編集長を意識しているためです。「だれも読まないようなミニコミ誌からの依頼原稿ほど手を抜くな。大新聞からの注文なんかは楽しんで書けばいい。テレビに出たらカメラの赤ランプがついているうちに一分間に一万語の速さで喋ること」。師は一九歳の私にそう教えた。以来三十七年、いまだに手の抜き



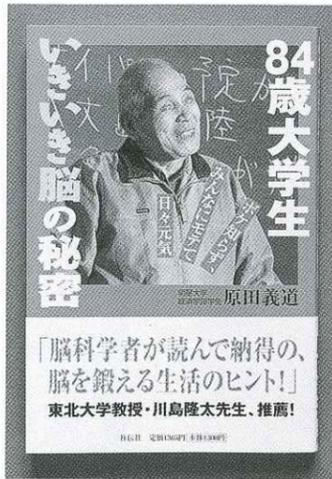
挿画：野崎義成

方も楽しみ方もよく分からず、一分間に百語ほどの体たらく。一九六五年の秋。高校二年生の私は憧れの谷川俊太郎氏(三十四歳)に会うことができた。あの日の緊張は、我が生涯最大のものかもしれない。ウブウブしかった? 私が引き攣り気味に「詩とは感動の所産ですよ」とかなんとか精一杯カッコをつけると、詩人は二十億光年のダークエネルギーを想うような静かな眼で、「それが理想だけど、プロは感動しなくても一流品をつくれなくちゃ」。さすがにおそろしいことを言う——内心シヨックの高校生は更に緊張して謹聴した。新高輪プリンスホテルに少し遅れて入ると、米寿のM先生は二百人のOBOGに囲まれていた。やや寂しげな面持ちながら、陸軍中野学校出身者らしい眼の力は相変わらず。スピーチをたのまれた私は、やはり緊張して総花的に媚びた無害そのものの話をやってしまった。ハイティーンの頃から全然進歩していない事実を確認した。苦小牧市長や広島県議会議員の自己宣伝ばい祝辞にイライラしていると、国立市議会議員になっている男が「こんにちホームレスにもならずいられるのはM先生のおかげ」などと二回も言ったので、私は酔いにまかせて野次を飛ばした。「ホームレスにはおめえより立派なのがいっぱいいるんだぜ。政治をやるならホームレスになっ

80代の星 原田義道さんの本!

大学の新聞全面広告に登場するなど、いまや若者を叱咤激励し高齢者に希望と勇気を与えるスターというべき現役大学生、原田義道さんが本になった。このほど祥伝社から発刊された『84歳大学生いきいき脳の秘密』(1365円)。サブタイトル通りの「ポケ知らず、みんなにモテて日々元気」な毎日を、原田自身がわかりやすく語ってくれる。原田流「脳力」を維持する五か条や原田流「健康」を維持する五か条など、すぐに役立つ秘訣も盛りだくさん。

76歳で夜間中学に入学以来、高校、大学と学ぶ意欲は尽きない。初めてさわるパソコンやビジネス英語も楽しくて仕方がないとおっしゃる。えくてびあんには高校生のころから何度かご登場いただき、本書にもえくてびあん掲載の写真が入っている。えくてびあんでも、わがことのようにうれしかぎり。



「脳科学者が読んで納得の、脳を鍛える生活のヒント!」東北大学教授・川島隆太先生、推薦!

この人この店

ドレスショップ poisson rouge (ポワッソン・ルージュ)

オーナー 齋藤美智子さん

お姫さまドレスがずらっと並ぶお店があります。だれがこんな着るんだろうとのぞいてみると、笑顔でドアを開けてくれた齋藤さん。このお店のオーナーです。白のウエディングドレスから色物ドレスにかかわってもう10数年。昨年までは幸町のマンションで「隠れ家ショップ」をしていました。お客様は音大生や花嫁さんがほとんどだそうですが、最近はカラオケやダンスをする方たちもいらっしやるとか。子供用のドレスもあって、3歳から70歳以上と幅広い客層。体型に合わせてお直しはもちろん、希望があれば舞台衣装なども作ってくれます。レンタルでは得られない満足感があるのに、お値段はリーズナブル。ところでポワッソン・ルージュって? 「フランス語で金魚のこと。尾ひれのヒラヒラがまるでドレスみたいでしょ」——ほんと、優雅に泳いでみたい。



〒190-0004 立川市柏町4-56-10 1F
TEL 042-534-6567
営業時間 平日 11:00~17:00
土日祝 11:00~19:00
定休日 毎週火曜日、第1・3土曜日と日曜日
http://homepage3.nifty.com/p-rouge/



店内



アメリカ製のドレス

写真：五来孝平



常楽我浄
真如苑提供番組くじようらくがじょう
スカイパーフェクトTV 216ch、マイテレビ 84ch
土曜 午前9時~9時15分
午後7時15分~7時30分
再放送/火曜 午前9時~9時15分
午後7時45分~8時
放送時間は予告なく変更する場合がございます。
立川に育てられて六十八年
真如苑
柴崎町1-2-13 Tel. 527-0111(代)

立川産の朝採り野菜を食卓へ
5月~9月 12:00~18:00
10月~2月 12:00~17:00
休日 日曜・祭日
JA東京みどり 幸町直売所
〒190-0002 立川市幸町1-14-1
Tel 042-536-2439

私たちは「と」のための会社です。
人と人、企業と企業、企業・商店とお客さま……
いろいろなコミュニケーションがあります。
私たち大廣社は、この「と」を的確に、迅速に、効果的に、
行なっている会社です。
と
大廣社は、企画デザインから印刷加工までを自社内で完結しています。
PLANNING・DESIGNING
PROCESSING・PRINTING
〒190-0022
東京都立川市錦町5-17-13
大廣社
TEL 042-527-1949
FAX 042-527-1911
E-mail info@daikousya.jp

郷愁への旅

乗兼広人 銅版画 [1]



「山村 (田麦俣)」

1999年 53.0×30.0cm 1版・グアッシュ

乗兼 広人

(のりかね・ひろと)

銅版画家

1949年広島県生まれ。
1973年創形美術学校版
画研究科修了。71年か
ら日本版画協会に出品
(86年会員推挙)、73
年日動版画グランプリ
(77年受賞)、2002年
「刻み続けて30年展」
が日米巡回。現在日本
版画協会会員。
立川市高松町在住。



銅版画で古い民家を描き始めて二十年以上になる。岐阜白川郷から富山側の五箇山に向かう途中で出会った堂々たる姿に圧倒されたのがきっかけだが、根っこはずっと古い。生まれ育った広島県三原市の実家も古い茅葺きの家だった。民家を描くのは、私の原風景を訪ねる旅なのかもしれない。

残っているのはほとんどが過疎地。住人が去ったり火災で焼失したりで急速に減っている。掲載作の家がある月山のふもと、山形県田麦俣も冬は独特の「鬼造り」屋根まで雪で埋まる豪雪地帯だ。厳冬二月に訪ねると、おばあちゃんがひとり暗い家の中で囲炉裏に火を焚き、訪ねる人もない家を守っていた。